

風

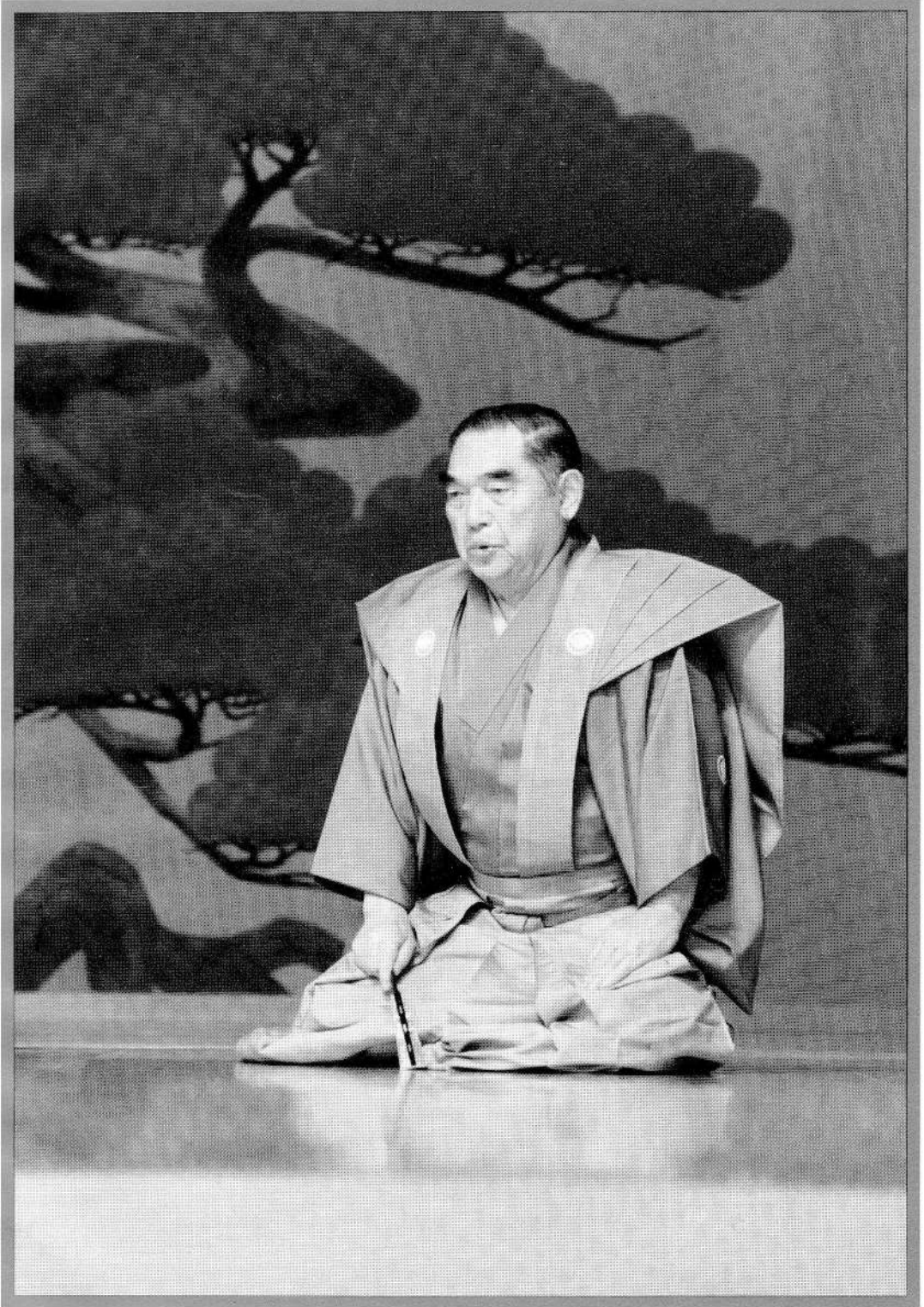
韻

第 26 号
(平成 5 年度)

神
戸
大
学
風
韻
会

風 韻 第 26 号 目 次

自演会を終えて……………師 匠	藤井 久雄…………… 3
神戸大学能楽部六十周年記念自演会を終えて……………顧問教官	井川 一宏…………… 5
六十年謡曲への想い……………OB会長	米花 稔…………… 6
風韻六十年の回顧……………旧1回生	藤井 茂…………… 7
能楽随想……………旧9回生	岩岡 正彦…………… 9
素人の謡五十年……………旧12回生	伊藤 欣二…………… 10
世阿弥の巨大な足跡……………旧14回生	小杉 岩蔵…………… 13
雑感……………旧14回生	松田幸次郎…………… 14
謡と私……………新3回生	杉本 孝昭…………… 15
元雅の悲劇……………新4回生	里井三千雄…………… 16
この世の華……………新4回生	牧 千雄…………… 18
幹事長から一言……………B43回生	清水 正治…………… 20
六十周年の歩み……………	21
平成四・五年活動内容……………	24
平成四年度決算報告……………	26
役員紹介……………	26
編集後記……………	26



俱利伽羅落

藤井久雄先生

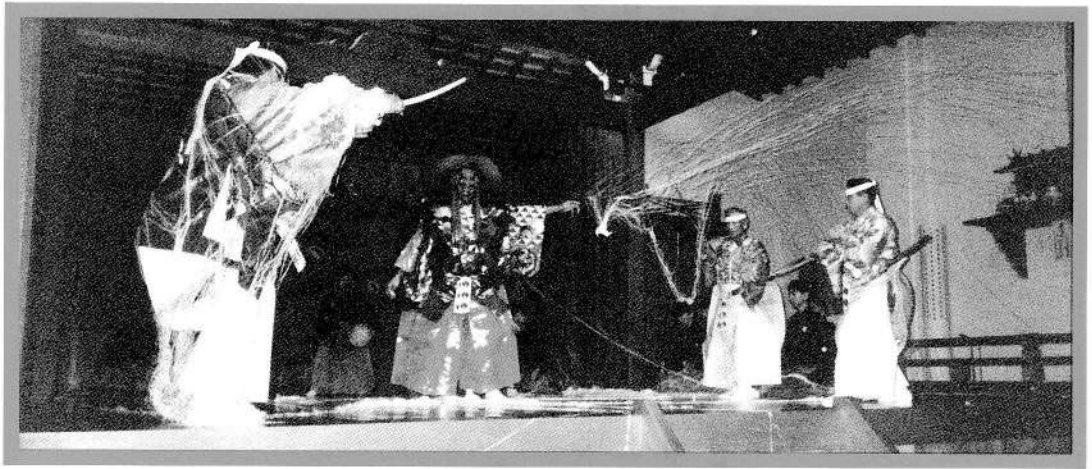
自演会を終えて

師匠 藤井久雄

神戸大学の稽古を引き受けてから早くも十年近くになりました。今回は創部六十周年記念自演会とありまして能「土蜘蛛」を出す事となりましたが、無事成功に終わり、ほっと胸を撫で下ろす次第であります。学生諸君も初めての演能という事で熱心であり、自然とこちらも気合が入るというものです。

能は非常に手間がかかるものですが、殊更に「土蜘蛛」となると、巢やら何やらで大変です。今ではお金を出せばいくらでも巢が買えますが、私が初めて勤めた頃は全て自作でありまして往生した事を覚えております。手間をかけて仕上げた巢も、サツとかけしまえばそれで終わりです。後には何も残りません。然し、それでも初めて能をやった学生諸君にとっては何時までも心に残る懐かしい思い出となることでしょう。

今年も、新入生の方も多く入られたと聞きまして、神戸大学能楽部のますますの発展を期待しております。然し、能の稽古は謡でも仕舞でも二十年、三十年と続けてこそ物になるものです。途中で投げ出さずに熱心に続けて欲しいと思います。



自演会 シテ・上嶋一臣 ”土蜘蛛” 於湊川神社神能殿



四十一回生 歓送誼会 (平成5年3月)

神戸大学能楽部創部六十周年記念 自演会を終えて

顧問教官 井川一宏

平成四年十二月六日は、記念すべき日になりました。湊川神社中能殿におきまして能楽部が初めて「能」を行いました。以前「能」に挑戦する希望が部員の諸君から出されたとき、正直困ったなと思いました。学生の身分にふさわしいことかどうか、大変な費用がかかります。伺いますと、関西の私学ではよく「能」がだされるようで、時代の流れは少しずつ豊かな日本社会を反映したものになっていくようです。しかし我が能楽部には、前師匠の宇治先生の時から学生の本分に沿った活動方針が受け継がれており、その精神からは、お金の問題が解決されたとしても、ある時期の部員だけが「能」を経験したり、ある部員だけが特別の役をすることは、良いこととされないからです。随分考えましたが、藤井茂先生や荒川先生にもご相談し、六十周年の記念として「能」をだすことを師匠の藤井久雄先生にお願いし、承諾していただきました。部員の方にはなるべく多くの人が参加でき、無理な負担が無いようにという条件を出し、さらに師匠には特に安く上げるようにとお願い致しました。それでも学生だけで費用を負担するのは大変ですので、神戸大学風韻会のOBの方からの寄付をお願いいたしました。寄付依頼の多い中で能楽部の活動に五十万円近くをさいて下さったことに対

し、OBの皆様は心から感謝いたします。

宣伝活動が十分でなかったこともあって、当日の観客数は決して多くなかったのですが、関係の方々が集まって下さいました。関係の方々から特別の寄付十万円も戴き、感謝を新たにしております。記念して昨年袴を多く頂戴いたしました故宇治先生のお嬢様もいらして下さり、懐かしいOBにもお目にかかれました。能「土蜘蛛」は、見栄えのするものでした。藤井師匠の三人の御子息の徳三先生・楽人先生・完治先生にもお手伝い戴き、地謡には学生部員のほか、師匠の近くに若手OBの馬島・梅園さん、太鼓に荒木さん、笛に貞光卓生さんと神戸大学関係者が多数参加した形となりました。「全員の参加で」という希望が配慮されていて、伝統は受け継がれていると感じております。

自演会のあとの懇親会では、師匠藤井久雄先生に御挨拶戴き、無事終えたことで一同ほっといたしました。これまでに育ててくださったお二人の師匠に深く感謝しております。これまでの顧問教官、OB会長の米花先生をはじめ多くの先輩方に大変な負担をお願いしております。風韻会の名簿・会誌「風韻」・プログラム等の印刷でいつも無理をお願いしていますコーヨー社長の松田先輩にこの場をお借りしてお礼申し上げます。なお、最近では若手OBの積極的参加もありますので、この連携が持続されますようお願いいたします。組織とか伝統を築くには時間とエネルギーがかかりますが、維持することにも努力が必要です。皆様の変わらぬ応援をお願いいたします。

六十年謡曲への想い

神戸大学名誉教授 O B会長 米花 稔

何よりも、本会六十周年を心からお祝い申し上げます。発足以来の故宇治正夫先生、それを受け継いで頂いている藤井久雄先生に感謝申し上げますと共に、歴代の学生幹事、学生会員諸君並びに数百人のO B会員と共に、御同慶の至りに存じます。昭和七年の本会発足の翌八年、前身の神戸商業大学に入学し、同時に宇治先生に謡曲の手ほどきを受けた当時を想起します。当時の学舎は、今の王子公園（当時は関西学院）の西、市立葺合高校、筒井台中学校、上筒井小学校のある辺りで（在学中半ばにここより六甲台へ移転）、ついでに言えば県立近代美術館の西の小公園から兵庫県福祉センターの辺りが阪急電鉄の神戸の終点であった。大学の正門が今の高校の入口、そこを入れて少し西、中学の辺りに講堂があった。そこで春秋の大会、時に幾十番の仕舞大会を催したことも思い出します。京阪神の友好大学と持ち廻りの定期合同能楽会も楽しいものであった。学外の西、一筋目の学生寮で合同練習をしていたが、別に個人的にも、熊内町の当時からの雲中小学校前少し南にあった宇治先生宅に稽古に通った。当時の二人のお嬢さんは今、宝塚のお宅とその近くでお元気であり、そのお世話で、宇治先生亡き後、藤井茂先輩を中心に門弟有志月二回（小生はよく欠席）仲間の謡い会をもたせて頂いている。

私事が続いて恐縮ながら、姫路の乾物問屋の当主であった父が、西宮の故村上義一先生について謡曲を嗜み、そのため小生も大学入学と共に本会参加を決めたのである。

その父が村上先生の姫路一陽会で公会堂に於いて「安宅・勸進帳」のひらきをし、いくばくもなく昭和十年、四五才で死去、大学で始めていたお陰で、その翌年の追悼会で「天鼓」を語らせて頂き有り難く思っている。その村上先生というのは、先頃の六十周年自演会で学生諸君が初めて能「土蜘蛛」を演じたが、その囃子の笛を受持ったのが卒業生の貞光卓生さん、本職の継承者でもあって、その本職の祖父の兄さんが村上先生にあたる。また六十周年自演会のおかげで、小生も、もう機会もないと思っていた湊川神社神能殿の舞台上、久しぶりに「鉢木」でシテ藤井茂先輩、そしてツレで語らせて頂き、地頭に藤井久雄先生、O B諸君の地で参加できたのである。

大学卒業後数年の会社勤め、あと大学の研究所に戻ってからも、ともすれば薄れ勝ちの「謡い心」を常に引き立て、学生の会、時に宇治先生の社中の会に参加させて頂いたのは、藤井茂先輩の心遣いであったことを感謝しています。

たまたま宇治先生社中の風韻会六十周年記念の昭和五十二年春の大阪の大槻能楽堂での会は、小生神戸大学定年退官にあたったので、前年秋、先生のお勤めで、父の思い出の「安宅」を語らせて頂くための、いわば本式の稽古に入った。その折に感じたことは、「叱られることのさわやかさ」「ひとりよがりの戒め」ということであった。年を重ねた者としての印象である。これこそこれからの

研究者としての姿勢そのものでもあることに気づき、先生の亡くなられるまで、毎週宝塚のお宅に通い続けたのである。ちなみにその「安宅」で同山等で付き合ってもらったのが、当時の学生諸君一名で、今もOB会での伏見君兄弟等の名前が見える。もうひとつ小生に忘れられないのは宇治風韻会六十五周年記念の三回目的湊川神社での催、昭和五十八年一月であった。ここで「正尊」のシテを謡わせて頂き、社中の方、神大OB会の方の御協力、その上、観世宗家故元正師を地頭に、宇治先生、藤井久雄先生らの地への御参加を頂き、感激の他なく、その時の地謡のプロの凄さに、心動かされたことであった。この間の神大能楽部六十周年記念自演会は、それ以来の湊川神社の舞台であったのである。

その六十年のお祝いの言葉のつもりが、自分の身辺雑記になってしまつて恐縮の他ないけれども、そして六十年通しては謡曲に必ずしも熱心でなかつたけれども、小生の研究者としての性格の背景として、この謡曲が抜き難いものになっていることを、今想わない訳にはいかないのである。身辺雑記になった所以でもある。

改めて神戸大学の風韻会、そして今の能楽部の歴史に感謝すると共に、故宇治正夫先生、藤井久雄先生、藤井茂先輩、荒川祐吉前顧問教官、井川一宏現顧問教官にお礼を申し上げる次第である。

風韻六十年の回顧

神戸大学名誉教授 旧1回生 藤井 茂

一

思い出は懐かしい。遠い昔の思い出は更に懐かしい。神大風韻会が発足してから六十年が経過した。人間でいえば還暦を迎えたことになる。この間の会の運行を身近に体験してきた私にとっては風韻会の六十年は懐かしい思い出の宝庫である。

二

私は大正十五年（昭和元年）、神戸高商（現・神戸大学）に入學、高商の昇格に伴つて昭和四年神戸商業大学へ進学、昭和七年商大第一回生として卒業した。卒業と同時に母校に助手として奉職、爾後助教、教授に進み、新制大学出発とともに経済学部にも所屬、神戸大学学生部長や経済学部部長に任せられ学生との接触は特に密であった。学生の課外活動のうち風韻会とポート部とは学生時代から縁が深く、会長や部長として運営にも携わり、先輩として今日にいたるまで交流が続いている。

三

私が高商へ入学した頃には学生の間には謡曲が盛んで、会名を鞍馬会といい、伊勢普宣先生が指導に当たっておられた。先般風韻会名

簿が出たがその第一ページに特別会員として載っている人々は鞍馬会時代の先輩である。

当時大学は上筒井にあり、西門脇に学生集会所が、正門前に寄宿舎（国維寮）があった。寄宿舎には鞍馬会の幹部や会員が多く熱心な誘いを受けて私も大学最終二ヶ年間は会員となり卒業間際の関西四校連盟の謡曲大会に出場して百万のシテを謡った。この時は流石に責任感に圧せられ一心に練習した。今でも百万は懐かしい曲の一つである。

四

当時の幹事諸君の奔走により新たに宇治正夫先生を師匠としてお迎えすることになった。宇治先生は昭和七年四月、学生集会所で記念すべき第一回目の稽古を始められた。それとともに会の名も宇治先生の社中の会名を戴いて神戸大学風韻会と改められた。

私はこの記念すべき日に学生集会所に向き宇治先生に御挨拶を申し上げ、学生の稽古の終わった後で先生の個人指導を受けた。これが私の本格的な謡曲修行の始まりであり、それから先生の逝去された昭和六十一年二月まで五十三年間、先生のきびしいが人間味あふれる御指導を受け、緊密な師弟関係が続いた。宇治先生の思い出は数知れないが、戦争が激しくなると本職の先生方さえ謡いを停止している状況下で、軍需工場で挺身隊として勤務している地方出身の女子工員の寮を訪ね、宇治先生や囃子方の先生達と仕舞いや謡いで慰問して廻った。思い出は今尚脳裡に鮮やかである。

五

私自身が謡いに熱中するほかに、神戸大学の同僚や先輩教授方にも誘いかけて宇治先生の門に加わって頂き、最盛時にはその数十三人に達した。六甲界隈の教授方のここかしこを稽古場にして水曜日の夜を練習日にした。私は世話役として終始近傍に座して所要を果たした。他人のお稽古を聞いているうちにひとりでに会得できるのも余得であった。教官の中には早く止められる方もあったが、中には熱心に稽古を続け、お能を演ぜられた方もある。特筆すべきことは、この中から四名の方がつぎつぎに学長になられたことで、ある第三者の方が歴代の学長が謡曲実演者であることは異とするに足ると評したことがある。

このような教官側にも宇治先生の門弟が多く、仲間同士で練習会をもつほか、学生の風韻会の大会にも応援参加することが多かった。現役の学生を中心に教官や先輩が応援参加するという特異の在り方は今も連綿と連なっている。

戦後暫くの間、拙宅を稽古場に供したが米花稔教授が参加され、更に後になって六甲台学舎に稽古場が移ってから荒川祐吉教授が、さらに後に井川一宏教授もこの道に入られた。米花稔教授は神大風韻OB会の会長として風韻OB会の懇親に力を注がれている。荒川祐吉教授は私の定年退官後、神大風韻会長として会の発展に幾多の創意を発揮され、とくに宇治先生から藤井久雄先生へのバトンタッチについては細心の注意を払って円滑に進められたことは感謝の一語に尽きる。井川一宏教授は荒川会長（顧問）の後を受けて顧問の

要職に就かれ、自ら藤井久雄先生の門に移り風韻会（神大能楽部）の進展のために全力を傾注しておられる。

昭和四十七年三月二十六日、私の定年退職を記念しての松泉館で祝賀会を開いて下さり、思い出の深い勸進帳のシテの役を与えられ、感激の涙と共に神戸大学を退いた。この会を主催された凌霄謡会（鞍馬会時代の先輩を中心とする謡会）の恩義に報いるために、会の世話役を買って出、爾来二十年、毎年六月末か七月初旬に松泉館で凌霄謡会を催している。年と共に新人を加え、現在では風韻会のOB実演会の感がある。

六

藤井久雄先生をお迎えしてからも、学生の自演会や送別会に参加出演して現役の皆さんと親交を深める喜びを噛みしめている。これらの会には藤井久雄先生が地頭に座られるので、先生のお隣に座って直接先生の謡いに接し大い勉強させてもらって頂いている。こうした機会の延長として去る平成四年五月十五日、湊川神社神能殿で催された藤井観世会の記念謡会に、神大の諸君と共に出演する機会を与えられた。曲目は安宅で井川一宏教授のシテ、学生諸君の判官と同山で、私はワキを精魂を込めて謡った。思い出の深い能楽殿で思い出の重なる曲を心ゆくまで謡わせて頂いて身の幸を滲みじみと味わったことである。

能楽随想

旧9回生 岩 岡 正 彦

風韻会幹事から会誌原稿の依頼が来た。いつも会の案内を貰って居るのに神戸・東京と離れて居るとはいえ、参加して居ない御託びでもあり、又六十周年記念号とあってせめて誌上参加致すべく筆を執った次第。

半世紀以上も前に六甲台で三年過ごした私なんかは現役の諸君から見れば化石ではなくても神話の時代に属するかも知れないが、結構本人はまだ若いつもりで、青春時代の事どもが、つい数年前の事のように思ひ出される。

ある事情で大学時代学問にもスポーツにも打ち込めなかった私は趣味の世界に逃避したかの様に風韻会のグループにとけ込み、特に三年の時は幹事を勤めたので殆ど学校生活を今でいふ「部活」で過ごした。

其処で三年間の風韻会の思ひ出を綴って見ようと思ったか、何せ昔の事で記憶違いもあり、又神戸には藤井先輩（時々東京凌霄クラブで御会いし昔の思い出話を話し合っ居る）其他御歴々が残って居られるし、風韻会六十年史も何らかの形残って居ると信じて居ると信じるので、私を中心とした思ひ出の記は見送る事とした。

ジャポネ・ルネッサンスチャあるまいが此処数年来の相撲や歌舞伎に対する大衆のフィーバー振りは大変なものであり、結果的に東

京では国技館や歌舞伎座の入場切符の入手は至難のことである。能・狂言に対する関心も前二者程のものではないにしても近年静かなブームとなりつつある様だ。

その一つの変化として最近新能（或は野外能）の演能はすさまじく、従来の奈良興福寺のその様にごく僅かなものだけでなく、東京では新宿新都心の新都庁広場をはじめ至る処で行われ又全国津々浦々で想像以上の場所と回数が演じられて居るようだ。

又、一寸雑誌観世をめくって見ても全国地方都市にも能楽堂が多く出来、同時に演能の回数も夥しいもので、他の四流を加えれば推して知るべしであろう。

私は武蔵野市に住んで居るが、すぐ隣の市に武蔵野女子大学があり、そこに「能楽資料センター」というものがあるというので、かねてより見学を考えて居たが最近そのチャンスを得た。所謂博物館的なものではないか、全大学の中世文学の研究対象としてあるものだけにその資料はなかなか素晴らしいものである。国宝の能舞台がある西本願寺の大学という印象もあり、歌人として有名で、数多くの創作能の作者でもあった土岐善磨（一八八五—一九八〇）が生みの親らしく、現在能・狂言のそれぞれ学内研究の二教授と所謂「変な外人」ともいふべき英語能の実践者としても著名なアメリカ人のリチャード・エマート助教授等で支えて居る。恐らく日本に於いて揃えられる限りの書籍と、全センター関係者で作成した能・狂言のビデオテープ・スライド等が備え付けてある。東京でも此種のものには他に野上豊一郎記念法政大学能楽研究所があるのみという。神戸大学も今日、文学部があるから将来この様なものが出来ればいいな

あと思った。

又、余談としてこのセンターを見学した翌日が「成人の日」で朝NHK能楽鑑賞「葵の上」があり、新しいシステムで演能の途中時々解説が入ったがその解説者が前日センターであった主任教授の増田氏であったのも不思議な縁であった。

この随想の終わりに現役や若い会員の諸君にアドバイスしたい事は、謡曲や仕舞は謡う事舞う事だけでも勿論意義はあるが、やはり若い人まして学問の世界に身をおく者として、能楽を文学・芸術の対象として研究することが望ましい。いはんや地元の神戸や上方は此処あずまや武蔵野なんかと異なり能の歌処・舞台に豊富な処だから実地研究も可能な筈。そういう研究の成果も今後会誌に発表されてはとの希望を以てこの拙稿を終える事とする。

素人の謡五十年

旧12回生 伊藤欣二

神大風韻会創立60周年を心からお慶び申し上げます。実は昨年私が宇治先生に入門してから丁度満五十年になります。よい時期に書かせてもらって倅です。プロの目からはお笑い草でしょうし、下手な謡をうたっている癖にお恥ずかしい次第ですが、思う仮述べさせて頂きます。

一 道成寺

謡・能には全く知識の無かった田舎出の私には、何となく深いものがありそうな、というだけで、大学卒業直後から始めた。些か面白いと感じ始めたのはやはり稽古十年経過後位からだろう。勤めに草臥れて余り練習せず、会出演の都度少々はられるという成り行きだったから余り上達しない。併し戦後間も無い頃、某プロの素謡「道成寺」を聞いて、その重く鋭い気合、玄妙にして血の出るような間合、そして深い怪しい美しさに打たれて、よし、謡を習うからにはとに角「道成寺」を謡うまでは、と深く心に決めた。能も見つた。緊密な劇的構成、妖艶華麗な変化、特に真剣勝負のような乱拍子。それは能の最も象徴的な曲であり、凡ゆる演劇的なものの中で最高であるとさえ思った。記憶違いでなければ、昭和四十二年風韻会創立五十周年に、大槻能楽堂で漸くお披露目させて貰った。無論未だに満足に謡えるものではない。

二 響座

「道成寺」を謡うには、ヨワ吟の優美の極致と、ツヨ吟の剛直の底辺を表現できなければ本物とは云えない。そのためには、声に底力が要る。長い間私はプロとアマには、何故声の力にこんなに大きい差があるのか、と疑問に思い続けた。修練は第一であろうけど、腹から声を出すには何うしたらよいのか。たまたま五年程前或書物で「響座」ということを説いた記事に出遭った。丁度その頃或同好

会で「道成寺」を謡わせてもらうことになっていて極低音を毎日練習していたのだが、ふと声帯の底が透った感じがし、そして下腹全体が響胴になった様に思えた。独りでその符合に合点したのだが独り善がりかもしれない。併し自分としては、爾来節廻しや人物曲趣の表現等非常に謡い易くなったと感じている。

三 写実性と音楽性

この両者の何方を重視するべきか、を宇治先生にお尋ねしたことがある。言下に「それは写実性です。」と仰有られたが、私はその後も疑問を持ち続けた。今は弁証法的に「写実性即音楽性、音楽性即写実性」と考えている。便宜的と思われるだろうけど、私としては長年突き詰めた揚句の結論である。

四 大成版謡本

謡曲は長年口傳であったために、以前は同じ観世流の先生方でも多少の違いが有ったようである。宇治先生も理屈をあげつらうことを嫌われたように思う。併し大成版観世流謡本が出来て詞章節扱い等の標準が作られた。(その経緯は藤波紫雪「うたひ六十年」に詳しい。)現代の我々は、やはり理論的なものをも学ぶことによつて上達は速くなるように思う。世代が交替して今の先生方は、大成版に則して理論的にも教えておられるように仄聞する。なお、梅若派の方は大成版とは微妙に違った所が有るように思える。

五 拍子

仕舞を一年習ったが全く残っていない。囃子も全く知らないの
で、拍子が生についてない。併し或グループの中で詳しい方がおら
れて、ほんの基礎だけを教えてもらった。思い込んでいた程難しい
ものではない。モチの正しい扱い方一つで素人の謡の表情が一変する
といつてよいのではあるまいか。三宅杭一「謡稽古の基本知識」の
中の「拍子入門」程度を腹に入れることは素謡にも必須だと思ふ。

六 道

武道、茶道などと云うが、謡道、能道とは云わない。これも長年
の疑問であつた。これは世阿弥の観客本位の芸能感が底に流れてい
るからではないかと思ふ。「抑、芸能とは、諸人の心を和らげて上
下の感をなさむ事、寿福増長の基、遐齡延年の方なるべし。」
（「風姿花傳」）とあるように、彼の傳書は何れもこの目的を達成
すべき方法を述べた芸術論であると云えるのではあるまいか。所謂
「道」として個人的精神的規範を挙げてはいないようである。けれ
共私はその底には単なる芸能を越えた厳しい精神修練を要求する
「道」の精神を看破出来ないものと思ふ。彼の説く「時分の花」と
は、年齢に相応した演技によつて最高の感動を喚起する、という事
であろう。併しそれは単に年齢を重ねることによつて簡単に達成出
来るものでは有るまい。年齢に相応しい人格形成が厳しく要求され

ていると云うべきであろう。ややもすれば、素人は己の巧者を誇示
し勝ちであるが、表現の最奥とされる「幽玄」とは無限の彼方の目
標であり、それに到達したと考えるとき、既に「幽玄」への道を外
れたものと云うべきであろう。無論趣味として単に謡いを楽しむ、
というのも一つの道ではあるう。

七 「姨捨」讚

昨年ある同好会で、不遜であるとお叱りを受けそうであるが、世
阿弥作の「姨捨」を初めて謡う経験をした。三老女物の一である
が、最高最奥の曲であるという感を深くした。深更、照り渡る中秋
名月の下に、無心に舞う白衣の老女の姿は、正に「幽玄」の極致と
いった趣がある。表現の手段としてやはり殆ど仏教用語に依つては
いるが、それは神仏を越えた宇宙的世界、或いは無の境地の世界と
でも云うべきであろうか。世阿弥は、「萎れたる花」を最高として
いる。

まだ書きたいことはありますが、余り誌面を汚す訳にも参りませ
ん。今思うことは、もっと早くから伝書や現代のいろんな参考書を
読んで、勉強して来ればよかつた、またこんな声の衰える年齢にな
る前にもっと稽古を積んでおけばよかつたということです。併し死
ぬまで精進は続けねばなりません。何卒先達各位の忌憚無い御指摘
御指導をお願い申し上げます。

世阿弥の巨大な足跡

旧14回生 小杉岩蔵

能楽愛好家が全国に何万人いるのか、よく分からないが、謡曲を知らないアウトサイダーの観能客がかなりいるので、これを含めると意外に多いと想像出来る。能楽を支える裏方のワキ方、囃子方、狂言方の後継者難が問題になり、数年前国立能楽堂が養成所をつくって、一般から入所希望者を募集して養成に乗り出し、成果を上げたというテレビ放映を見たことがある。芸道だけでなく、至る所にある各種事業者の共通の悩みが後継者難であるから、子が親の後継者になりたがらないのは現代世相の潮流で、対策として希望者を集めて育成するということは、優れた解決方法である。

神大風韻会創立六十周年の由、小生達がいた頃から既に五十年を経過している。関西から遠ざかっており、宇治先生の会に数回顔をだし、その当時の大学生諸君の発表を見せてもらったことはあるが、ほとんど没交渉で今日に及んでいる。この会誌によって、会の情報提供を受けているという程度のお付き合いであるが、謡曲趣味を通じての連帯感はい依然として根強いものがある。

宇治先生が亡くなられる少し前に、会の師範が藤井久雄先生にパトントタッチされた。藤井先生には、個人的面識はないが、小生在学中の頃から、舞台は何度か拝見しており、その当時（昭和十七、八年頃）既に関西能楽界の弱冠重鎮として活躍しておられ、重厚な芸

風に敬意を払っていた一人である。

さて、謡曲仕舞を習って、その芸域を深めるだけでなく、これによって能楽鑑賞の下地になる基礎知識ができ、能楽特有の幽玄の境にひたる楽しみがある。日本の古典芸能のほとんどの曲が、世阿弥元清という一人の作者によって創作、作曲、振り付けられ、作者の死後五百五十年を経た今日でも、原作が忠実に伝承され、恐らく今後についても永遠に継承されていくものと期待されているという厳然たる事実は、大いなる驚きであり、始祖世阿弥という人物の巨大さに、畏怖の念を禁じ得ない。

世阿弥元清、一三六四年―一四四三年。八十才で亡くなっていく。二十二才のとき、父親阿弥清次が死去。世阿弥父子は將軍足利義満の知遇を得て、猿楽を集大成し、自らの創作による謡曲をシナリオとする現行の能楽を完成した。謡曲の作者は、世阿弥のほかに父親阿弥清次、娘婿の金春禪竹も何曲か書いているが、圧倒的大部分が世阿弥一人の作と伝えられる。映画監督兼俳優のチャールズ・チャップリンが創作、脚本、監督、演技の各面を一人でこなし、風刺に富んだモダンタイムスや殺人狂時代などの傑作を残して、そのオールマイティ振りが注目を浴びている。チャップリンも凄い人物だが、世阿弥はチャップリンとは比較にならないほど巨大な文化遺産を創出した、きわめて卓越せる先覚者である。五百年以上という長い歳月を経て、世阿弥と並び、または上回るといふ能作者は現れず、きわめて、厳格に原作が忠実に伝承されている。優れた演者の残した特殊な演出方法が、能の「小書き」としてバラエティを添えていることや、僅かであるが、新作能が例外的に追加されたり、逆

に長い間冬眠状態にあった曲が復活上演されたりといった動きはあるが、基本的には、世阿弥時代そのままに伝えられている古典二百数十曲が主力になっている。

世阿弥十六部集という遺稿がある。東京文理大の能勢朝次教授によつて、昭和十五年から十九年にかけて評釈が大成され、岩波書店から刊行されている。小生の手元に上下二巻からなるこの評釈があるが、時折拾い読みをして、世阿弥のオールマイティの才能に驚嘆を繰り返している。その中から強い印象を持ったことを若干述べる。

幽玄について、世阿弥はいう。幽玄の芸はむずかしい。演者は、常日頃から、高貴な人達の言葉つかいや立ち居振る舞いを観察し、悠々迫らず、正しい礼儀作法や話かたなど、高貴な人達にあやかるほどの域に達して、はじめて幽玄の能を演ずることができると。

見所との呼吸の一致を強調している。演者は舞台の上だけで演ずるものではなく、見所の観客の呼吸に合わせていかねばならない。シテの一セイの出のとき、観客が橋懸のシテを凝視して、今か、今かと固唾を呑んでシテの謡い出しを期待しているその一瞬を捉えて発声せよと教えている。

見所に対する配慮は、高貴の方（将軍家を指すのであろう）になると、格別である。能には、序破急の三段階があるが、高貴の方が遅れて来られたときに、能が破の段階まで進んでいても、お客様にとっては、まだ序の気分であるから、演者は、気持ちをお客様におきかえて演出し、徐々に破の方へお客様を誘導していくのだと説く。しかし、そうはいってもなかなか難しいことで、そのような日の能は

スツキリした出来栄にはなりにくい、ともつけ加えている。

世阿弥は、実子元雅に相当の期待を寄せ、一子相伝のすべてを伝えたが、世阿弥七十才の年、地方巡業中の元雅が急死し「当流の道絶えて、一座既に破滅しぬ」と嘆じている。

将軍義満の死後、幕府から疎外され、七十一才になって佐渡に流されている。十六部集の中の「金鳥書」には、その佐渡滞在中に書いた若州、海路、配処など七篇の謡曲（いずれも短篇）が収められている。佐渡に三年程いて都に呼び戻され、娘婿金春禅竹のもとで生涯を閉じたと伝えられる。晩年は不遇であったが、不滅の能楽を大成した偉業は、まさに世界に誇る巨星である。信長・家康・秀吉・など、武将の伝記は盛んに刊行され、ドラマ化されているが、世阿弥の顕彰の人心の啓発に益するものと考えられる。

雑感

旧14回生 松田 幸次郎

仕舞三年・素謡十年といわれる。仕舞は型を覚えればよい。謡は節をモノにすればよいだけでも、それくらい年の修業が必要といわれたことであろう。けれども、立派な先達の名人芸を聞き、また観させて頂いていると、流儀の如何に不拘芸の達者さだけを感じていた年代は、上の三年・十年と同じという見方が考えられよう。芸の心の中にも引き込まれ、隅田川に涙を流し、卒都婆にこの世の無情を感じさせられるのは、流儀の名譽を背負って永年に互っ

て磨きあげられた修業だけとはいえない。求めども求めども広く、深く、遠い芸の世界としみじみかみしめることが分かるのに五十年余りもかかった。

昨夜NHKの夜の番組「愉快にオンステージ 布施明ショー」をみた。中村雅俊の「歌を唄うときは身体のどこに注意しているか」の問いに、布施氏は「眼と腰です」といった。眼は歌の気持ちを表し、腰は腹の底から唄う者の身体の中心ともいつているのではなからうかと私なりに解釈した。演能に当たって役方も地謡も腰から声が、そして役方の眼の動き・「面」の動きが、すべての結果となって表されることであろう。腰は芸事ばかりでなくスポーツをしても、諸事すべての重要な身体のパーツだと思つづく思つた。

梅若家元を競つた故万三郎師と故六郎師は、流儀をかけての分裂により、お互いに聞く耳をもたず、モノを聞かず・言わずに永い別れが続いたが、万三郎師が病にかかり、或る日「六ちゃんに会いたい」と口に漏らし、周囲の様々な取りつくりいで六郎師も快く受け入れて、或る日或る場所で久潤の盃を分けあって、ともに一夜を過ごした。そして、その数日後に万三郎師は亡くなった。兄弟愛という人の情けは死ぬ前によみがえり、人間愛が流儀を越えたといわれている。

謡と私

新3回生 杉本孝昭

いきなり私事で恐縮ですが、この二月七日は亡父の七回忌にあたりました。実は父は神戸高等商業学校の大正一二年卒業で、凌霜の第十七回生になります。

そもそも私が神戸大学に入学したのも、当時（昭和二十六年）の我が家の経済状況からいって自宅通学のできる学校以外に選択肢がなく、たまたま父と兄がともに凌霜人のためにさしたる理由もなく、ごく自然に経済学部に進んだというわけです。

謡曲との縁も、父が若いころから謡をやっていて私が物心ついたころから父が気が向くと謡を唸っていた記憶があり、特に「鉢木」「屋島」などの一節は意味も分からないままに強い印象が残っています。父の遺品の中には観世流の謡稽古本が数十冊あり、先日も久しぶりに眺めて見たら例えば「小袖曾我」の奥付けに、大正九年十月十五日発行、昭和二年一月二十日第九版発行。著作者 観世元滋。発行者 檜常之助。定価 金三十銭とあり、現在では観世謡本は二千元あたりですから何倍になりますか。

六甲台に進学した頃（申し訳無いことですが）講義に余り興味が持てず正門入口の手前の学生会館で何やら大声で唸っている連中の仲間入りをしたのが風韻会との因縁の始まりですが、その背景にはやはり父の影響が知らずのうちにあつたように思われます。

その頃は宇治正夫師範がまさに精気漲るご指導ぶりであり、柚木

馨教授・丹波康太郎教授・藤井茂教授・米花稔教授のお姿に接する機会も教室の講義よりも、謡の稽古や発表会、その後のコンパの方が多かったですと記憶しています。

当時風韻会で一年後輩でT・T君という丹波ゼミでマジメ人間を絵に描いたような男居りまして、これが縁あって後年私の妹と結婚したのですがその話が起こって私に意見を聞かれた時、謡をやるような男なら間違いないと余り合理的でない理由で賛成したのですが、それが間違いでなかったことは三十四年後の今日が証明しています。それにつけても仲人をして下さった丹波先生がお若くして他界されたことはもことに残念に存じます。

もう一つ、藤井茂先生との同期生に吉岡篤三という人物があり先年亡くなりましたが、やはり風韻会の大先輩です。住友信託銀行の重役を務めあげたあと晩年は能謡曲に精進されました。この方が実は私の父の後輩ということで家族同様にお付き合いがあり、吉岡氏の娘さんの結婚のお世話を父が引き受けたほか、吉岡夫人の姪と私に縁談が成立して結婚式の仲人をしていただいたという次第です。

このように思い起こしてみると私の人生において、謡との出会い、特に神戸大学での宇治師範、藤井先生はじめ先輩後輩諸氏との出会いが実に大きな意味をもっていることにしみじみと感慨を覚えずるを得ません。

昨年十一月に還暦を迎え三十七年間勤務した会社も定年になりましたが気持ちの上ではまだ四十八才ぐらいのもりであり、仕事も従来どおりで引き続いてやっていますが、そろそろゆとりを持って謡の世界に立ち戻ろうかなと考えている今日このごろであります。

元雅の悲劇

新4回生 里井 三千雄

能楽の完成者世阿弥の生涯については幾多の研究がなされ、又彼によって書かれた「風姿花伝」をはじめ多くの能楽理論書により世に知られているが、若くして不遇の中に亡くなった彼の子元雅についてはあまり知られていない。

元雅の訃報に接した世阿弥はその心情を「夢跡一紙」に記しているが、その中に「根に帰り、古巢を急ぐ、花鳥の同じ道にや春もゆくらん―中略―さても、去八月一日の日、息男善春、勢州安濃の津にて身まかりぬ。老少不定の習い、いまさら驚くには似たれども、あまりに思いの外ならん心地して、老心身を屈し、愁涙袖をくだす。さるにても、善春、子ながらも、類いなき達人として、むかし亡父此道の家名を承けしより、至翁、又わたくしなく当道を相続して、いま七秩に至れり。善春、又祖父にも越えたる堪能と見えしほどに、うとも云ふつくして謂はざるは、人を失う。」と云う本文に任せて、「道の秘傳奥義ことごとく記し傳えつる数々、一炊の夢と成りて、無主無為の塵燠となさんのみ也。」とあり、子ながらも類いなき達人と囑望し、家と芸事の唯一の後継者と頼む元雅を失った世阿弥の悲痛哀惜の情は凄く人の心を打つものがある。

右の「夢跡一紙」本文中にもある様に元雅は伊勢の国で亡くなっ

ている、元雅の死の背景には不可解な謎があると謂われている。

父世阿弥の全盛期は応永十五年（一四〇八）三月、時の將軍足利義満が後小松天皇の行幸を仰いで更に最初の展覧能を催しその主演を勤た頃であった。（世阿弥は四十六歳）

ところが、この展覧能から僅か二カ月の後、義満は病を得て五月六日にこの世を去った。政治の実権は嫡子義持の手に移ったのだが、それとともに世阿弥の栄光は次第に衰微の途を辿り始める。四代將軍義持は田楽新座の増阿弥を寵愛し、この後十年間の記録によれば田楽能の興行が完全に申樂を圧倒している。やがて応永二十九年（一四二二）、六十一歳の世阿弥は出家して家督を長子の元雅に譲つたと推定され、この元雅が二年後の春には醍醐寺清滝宮の楽頭職に任ぜられる。増阿弥は世阿弥も認める優れた演劇者であり、ただしも義持の時代は観世一座にも将来の希望があるように見えた。だが間もなく義持も没してその弟の義教が將軍職に就くと世阿弥と元雅の親子は露骨な迫害を被ることになる。即ち義教は世阿弥の甥にあたる音阿弥元重を後援して、そのためにつきつきと元雅から公式の演能の場所を奪うのである。先ず永享元年（一四九二）には彼は世阿弥と共に仙洞御所への出任を禁じられ後小松天皇の召命にも拘わらずそのかわりに音阿弥が参内する。更に翌年の永享二年には清滝宮楽頭職士へ義教によって元雅から音阿弥の手に渡される。屈辱に耐えかねた元雅は都を捨てて越智に隠退し二年の後、前記の如く伊勢安濃の津に各死を遂げたと伝えられる。元雅の弟元能も同じ頃仏門に入り老齡の世阿弥は万斛の恨その人で元雅追悼の「夢跡一紙」をしたためることになるのである。

ところで元雅の死の謎とは何であつたらうか。昭和六十一年にNHK歴史ドキュメント「謎の能面―観世一族の悲劇」が放映されたが、其処では元雅が京都に於ける観世座復権のために南朝方のスバイとなって活動していた可能性があると述べている。それによると醍醐寺楽頭を音阿弥に奪われた彼は大和の越智庄という所に向かう。ここは南朝方の越智氏の領地であり、元雅はそのバックアップのもとで一座の立て直しを目指した様である。越智氏は丁度此頃、北朝方と戟戈を交えていた。迫害が始まった翌年の永享二年（一四三〇）十一月、元雅は吉野山中の天川という所に姿を現した。天川は吉野山の南、深い山々に囲まれた谷あいの村で元雅はここで「唐船」という能を舞つたという。しかもNHKの調査によると元雅の内面を窺い知る上で貴重な手掛かりがあつた。天川神社に元雅が奉納したという一打の能面が伝えられていたのである。それは「阿古父尉」という能面で、その能面の裏に

「奉参進 弁財天女御主前 允之面一面

心中祈願 成就円満也

永享二年十一月日 観世十朗啓白」

と書かれていた。観世十朗は元雅のことである。これはまさに元雅自身が使つた面に違いない。果たして「心中祈願」が意味する心中の願ひとは一体何であつたのだろうか。

元雅が天川に來た理由―それは危機に瀕した世阿弥直伝の能の復興を願うことであつたらう。その願ひは芸能の神、弁財天に向けら

れただけでなく、ここを拠点とした南朝そのものに向けられたのではなからうか。北朝Ⅱ將軍家という支持者を失った一座は経済的な理由からも新しい強力な後援者が必要としていた筈である。元雅は悩んだあげく、南朝の為に身を呈する道を選んだのではないだろうか。それは危険であっても、彼にとつて正統の能を活かすべき道ではなかつたのか。伊勢の国で元雅が謎の死を遂げるのは天川に能面が奉納されてから二年後の永享四年（一四三二）であつた。まだ三十代の若さであつたといわれる。この元雅の死についても北朝方に暗殺されたという説もあり真相は不明のままである。

「夢跡一紙」の最后には、世阿弥自作の歌が二首書かれている。

「思ひきや見は埋もれ木の残る世に盛りの花の跡を見んとな」

「いくほどと思はざりせば老いの身の涙の果てぞいかで知らまし」
元雅を失つた以上、能の道もこれまでという様な強い絶望感がここには表れている。

事実、元雅は才能ある人物だつたらしい。「隅田川」「弱法師」「歌占」といった世阿弥に劣らぬ名作を生み出している。彼の作品に共通しているのは一種哀調を帯びたトーンである。それは悲劇性と言い換える事もできるが「隅田川」で我が子に死なれた母親が狂乱の余り子供の幻影を求めてさまよう様にその悲劇は決してハッピーエンドとなる事がない。私は「隅田川」の能を観る度に、そこに元雅自身の暗い内面が投影されている様に思えてならないのである。

この世の華

旧4回生 牧 千雄

誰にも、生涯忘れ得ない日々と云うものがある筈ですが、風韻会とともに過ごした青年の日々は、私にとつて、甘酸っぱい青春の想い出とともにかけ替えのない時間であつたのです。その真つ只中にあつた折は、それが将来どんな重味を持つのか、考えることもなく、唯々、心の中では師匠に反発し、一方では何とかして謡と舞の技を磨きたいとのみ、熱にうかされた様に考えていたのであります。生意気にも、能も謡も舞台芸能である限りは、見物に見せて、感動を分かち合うことこそ本望と云う思いにとりつかれていて、上手に聞かせ、上手に見せることを、秘密裡に目標にしていたわけがあります。それが、あの青年の頃の私として、正しかつたかどうか、今では自ら判定もし兼ねるのですが、少なくとも、あれ以来、恋愛をしても、仕事をして、あれ程夢中になれないままに、間もなく五十代を終わることになってしまったのは事実であります。人に見せて感動させると云う目標は、何となく自己顕示が過ぎる様ではありますが私にとつては、それに成功することが、まさに「私の華」でありました。何とかして、上手に謡いたいと云う気持ちには、傍から見れば、熱心この上なく精進していると見えたのでしょうか、神大風韻会の幹事を、畏友里井三千雄兄とともに勤め、その責任から、増々、上手に謡わねばと云う思いを募らせていた様であります。かくて私の青春は、私の「華」を開かせるために費され、

学問とは程遠く終わったわけでありませぬ。尤もその「華」は、自らは開いたと思つても、観客から見れば、「華」はおろか、芽も出ておらず、まして師匠から見れば鼻持ちならぬ弟子であつたことでしょう。しかし開こうが開くまいが、只管、上手に見せたいと願う心と努力そのものが私にとつて「この世の華」であり、自由勝手に謡の中に思いを込めることが、私にとつて「その華」に自ら酔うことでありました。四百年も昔に、流祖は、芸術論を展開し、

「花」についての数々の名論を残されています。舞台人であつた偉人の思想と、私が云々することは出来ませんが、案外、世阿弥の「花」は、私の体験した、至極単純な、青春の「華」——上手に見せるためのエネルギー——と相通じているのかも知れないと、今頃になつて思うようになりました。

学生時代は、当然ながら、二十二才で終わりました。私の「華」も一度は涸れたかに見えておりましたが、根は生残り、八年の間に欧州暮らしの日々も扇を百番綴を手離さぬと云う、未練たつぷりの有様でした。且ての華は、お家元の欧州公演や、藤井茂教授と肩を組んでの「デュッセルドルフ深夜路上での玉葛同吟行」などの度に、私の中に蘇っておりますが、も早、上手に見せたい聞かせたいと云う華の色は果敢なくも褪せていた様であります。

漸く中年と云われる年齢に差しかつた頃から、私の「華」は、専門能楽師の演技の中から感動を見出すことになつて来ました。強い感動を演者と分かち合えたと思つた瞬間、それは私の青春の「この世の華」と完全に重なり合い恰も、自ら上手に見せ得たのと同じ思いに浸るのであります。これこそが、風韻会に育てられた私の喜

びであり、風韻会によって私に与えられた「この世の華」そのものであります。この「華」は私の全生涯の中で、形を変えて開きつづけ、常に感動をあたえつづけてくれる筈であります。

風韻会六十年の歴史は、それに関わつた人々に大きな影響を与えてやまないでしょう。私についても、申上げた通りです。でも、私から風韻会及び神大謡曲部になし得たことが、何と少ないことかを顧みて、恥ずかしいことに思います。しかし、先日、記念公演で、学生諸君が見せた高い技術水準と芸術的感動——いに能一番を好演するに至つた精進を思うとき、その成長に感激するとともに、且ての私と同じ「青春の華」を、学生諸君が清々しく舞台上に自ら見たことを信じたいと思つたのです。

五十を過ぎて二度目の欧州駐在は、単身でありました。雪深く、雲の低い北ドイツの四年間は、能の世界とは隔たつた雰囲気に見えましたが、よく見れば室町時代と同じ様な精神構造を抱いたハンザ諸都市の空気は、静に触れる度毎に、且ての「青春の華」に繋がるものを、私に見せてくれたのです。中世的であり乍ら近代資本主義に背骨を与えたハンブルグのプロテスタンティズムの影——その微妙な混じり合いの中で育つたハンブルグオペラの華やかさは、どう見ても舞台と観客とで感動を分かち合う面白さを色濃く出し、私に再び「青春のこの世の華」を蘇らせてくれたのであります。能や謡を舞台で見ることこそ出来ませんでした。表紙の傷んだ百番綴と、親骨が地紙から離れかけた扇を撫して、北海から吹きをつける粉雪を見つめて鉢木を力を込めて謡つて見ると、なんとなく似つかわしくも思え、自ら上手に謡えたらうと慰めて、且ての「青春の華」を

鮮やかに画き得たのであります。

近時は東京や大阪を落着かないテンポで往来する日々ですが、不思議なことに、私の「心に咲く華」は、再びあの六甲台の日々に回歸しようとしているのです。何を愚かなと思う傍から、再び稽古を積んで、上手に聞かせたいと云う欲望が湧くのは何故でしょうか。勝手な御無沙汰をしながら、懐の広い教授方に甘え、今以て神戸大学能楽部との縁を保たせて頂いているのは、再び「この世の華」を私の中に見たいと云う果敢ない望みのためでもあります。

学生の日々とは不思議な時間です。精々四年間に過ぎない「華を見た時間」が、その後四十年も、そしてこれから命ある限り、私を見えぬ香りの網で縛り上げているのです。その因果で、常に「この世の華」を夢見る破目に陥り、今以て醒めておりません。風韻会と、多くの先輩に限りない感謝を捧げつつ、これからも私は、「折々の華」を見る事ができるよう、願っております。

幹事長から一言

B43回生 清水 正治

月日がたつのは早いもので、私が幹事長になって半年近くになります。この半年は、幹事長の立場の重さ、難しさを改めて痛感させるものでした。しかし、こうして無事、部を運営して行くことが出来るのも、他の部員達の協力のお陰で、デキの悪い幹事長をよく支えてくれております。

昨年は、六十周年自演会ということもあり、部創立以来初めてのお能「土蜘蛛」をさせて頂きました。私はトモの役をやらせて頂いた訳ですが、舞台が終わった後の感動はたえようがないものでした。部員一人一人がそれぞれの役をこなし、一つの能を作り上げた、私達が一体となって作り上げた、そう思うだけで改めて能をさせて頂いてよかったと思うのです。その時二回生であった、技術的にもまだまだ未熟であった私にトモという役をさせて下さった藤井久雄先生をはじめ先輩方には深く感謝しております。

現在、部員は二十七人です。今年は九人もの新入生を迎えることが出来ました。

「今まで、先輩方に教わってきたことを新入生たちに上手く教えられるだろうか」という不安はありますが、能楽部六十年の良き伝統を少しでも伝えることができればと思っております。

能楽は限りなく奥の深いもので、私達学生が早々に理解出来るものではありませんが、日々精進を怠らず、謙虚さと向上心を持つて稽古に打ち込んでいけば、能の世界をほんのわずかでも垣間見ることが出来るのではないかと、また、その過程が自分達のこれからの人生において必ずや有意義なものになるだろうと信じて、日々練習に打ち込んでいきたいと思えます。

今年の自演会は能はありませんが、部員全員が一体となった若さ溢れる舞台をお見せできればと思っております。

最後に、これからもいろいろとお世話をかけることと思えますが、藤井先生をはじめ、荒川先生、井川先生ならびに諸先輩方よろしくお願い致します。

神戸大学能楽部 六十年のあゆみ

部室に現存する会誌「風韻」(昭和三七年度版・第二号が最古)から六十年の歴史を綴ってみました。

西 暦	年 号	月 日	主 な 出 来 事	世 界 史
一九一五	大正 四		観世流「青瓢会」発足(詳細不明)	一九一四 第一次大戦勃発
一九二六	大正一五 (昭和元)		鞍馬会、盛会(伊勢普宣師) 藤井 茂先生(風韻会初代会長) 神戸高商に御入学	一九二五 治安維持法成立
一九三二	昭和 七	四 一二・二五	宇治正夫師による最初のお稽古(於 学生集会所) 神戸商大謡曲大会(於 神戸商大講堂) 宇治先生御指導下の最初の大会。素謡三番 仕舞九番 独吟五番 番囃子一番 舞囃子一番 連吟一番 「鞍馬会」から「風韻会」に改称 (この間、記録皆無)	一九三二 上海事変 五・一五事件
一九三三	昭和 八			一九三三 国際連盟脱退
一九四九	昭和二四	五・一五	神戸大学発足 学生連盟謡曲コンクール開始	一九四五 終戦
一九五四	昭和二九			一九五六 国際連合加盟
一九五七	昭和三二		三大学交歓会(現 旧三商大交歓発表会)開始	
一九六一	昭和三六	三・二六	会誌「風韻」創刊(現在、第二五号まで発刊)	
一九六二	昭和三七	五	串カツ屋「狸々」開店 於 開学記念祭。赤字財政脱却の希望の星。一皿五十円 「狸々」はおでん屋を経て、現在焼鳥屋である。	

一九六四	昭和三九	十一 六・一四	<p>風韻会三十周年記念大会（於 神戸大学講堂） 四大学交歓謡会（現 三大学合同舞台）開始 四大学とは神大、甲南、商大、女子薬科大で、例年の女子薬科大との交歓会が発展したもの。 現在は神大、甲南、関学 姫路分校の鶴甲移転に伴い、風韻会姫路支部が鶴甲風韻会と改称 教養部にジュニア部室獲得。 現在、たまり場として立派に機能している。</p>	一九六四 東京オリンピック 開催
一九六五	昭和四〇	四・一五 十一・二九	<p>都留好子先生謝恩謡大会 於 姫路本城能楽堂。姫路支部風韻会の都留好子師への謝恩謡会。素謡、仕舞、連吟。参加数七十二名 現部室へ移転（「やや狭いがござれい」との記述アリ） 神戸大学風韻会発表会開始 於 六甲台講堂。顧問、柚木 学長急逝により二十日の予定を延期。舞囃子四番、番囃子一番、素謡三番、仕舞三二番、連吟九番。 ジュニア合宿開始（於 摩耶山王蔵院） この頃、すでに「スタンツ」があった。 スタンツとは合宿最終日前夜に行なわれる寸劇で、現在は三班に分かれ、一回生男子に女装させるのが恒例である。</p>	一九六六 中国文化大革命
一九七〇	昭和四五	十一・二三 十二・五	<p>大学紛争のあおりで活動混乱。春合宿中止 串カツ屋「狸々」全共闘に屋台を壊される。 於 学祭園遊会。応急処置のあと、営業続行。 学連秋季大会謡曲コンクール廃止。合同能開始「紅葉狩」</p>	一九六九 月着陸

一九七二	昭和四七	三・二六	藤井教授定年御退官祝賀記念素謡会 於 松泉館。素謡一七番、仕舞六番、舞囃子、独吟、連吟各二番 新会長に荒川祐吉先生就任される。 神大風韻会四十五周年 第一回風韻会OB会開催 於 蘇州園、参加二十四名	一九七三 オイル・シヨック 一九八〇 イラン・イラク
一九七七	昭和五二	?	五十周年記念秋季大会 於 上田能楽堂。素謡九番、連吟二番、仕舞二五番、舞囃子六番。	戦争勃発 一九八三 藤井久雄先生自叙伝 「鶏肋抄」刊行さる
一九七九	昭和五四	九・一	三十二回生歓送謡会 宇治正夫師御指導下の最後の大会 藤井久雄先生に御挨拶 藤井久雄先生による最初のお稽古 藤井観謳会春之会 初出演（連吟「楠露」） 「風韻会」から「神戸大学能楽部」へ名称変更。	
一九八二	昭和五七	十一・二二	宇治正夫先生逝去される 新顧問教官に井川一宏先生就任される 神戸大学能楽部六十周年記念自演会	
一九八四	昭和五九	三・一七		
一九八六	昭和六一	四・三		
一九八七	昭和六二	四・二一		
一九八七	昭和六二	五・二七		
一九九二	平成四	一二・六		

(編集 新谷 宏)

平成四年活動内容

三月 春合宿（於 小豆島 きらく荘）

練習曲「東北」「嵐山」「鞍馬天狗」等（二年生）

「屋島」「安達原」等（二年生）

歓送話会（於 松泉館）

舞囃子「融」 石川 誠

「忠度」 北村 浩

「高砂」 高森 理恵

「熊野」 沼本 直子

四月 古典芸能発表会（於 神戸大学学生会館和室）

新人生勧誘活動の一環として、仕舞を十番程発表しまし

た。

五月 旧三商大発表会（於 湊川神社神能殿）

一橋大・大阪市大と合同で発表会を催しました。

ジュニア合宿（於 六甲パーラー）

二年生が一年生に謡や仕舞を教えます。

アーバンリゾートフェア出演（於 六甲区民センター）

仕舞を五番発表しました。



なごやかな雰囲気ですんだ神戸大能楽部の舞
台一舞台・区民ホール

神戸大能・邦楽部員ら 区民ホールに出張公演

灘でなつかしの学園祭

青春の勢団気を地域の人で学生と区民の交流を図る
たちにも味わってもらおうと、灘区民の会などが初
と十八日、神戸市灘区の灘 慶などの仕舞をユニ
区民ホールで、同区内にあ クな解説とともに演じ、
る神戸大の学生が参加して、始終なごやかな笑いを呼ん
「なつかしの学園祭」が開 だ。

続いて、邦楽部、交響楽 団が、琴、尺八の合奏ク
ア神戸大のイベントで、 ラシック演奏など目ま
同大学の能楽部、邦楽部、 客が飛び入りで参加する
交響楽団から約百人が出 十一分間指揮コーナー
演。

学外での出張学園祭 もプログラムに加えるな
めて企画した。 ど、ホールは若々あふれる
ステージでは、まず能 演目で熱気に包まれてい
楽部が「高砂」や「船弁 た。

平成5年4月19日 神戸新聞より

六月 新歓コンパ（於 六甲パーラー）

部として初めて正式に一年生を迎えて行います。

学連春季発表会（於 大槻能楽堂）

連吟 「土蜘蛛」「吉野天人」
（一・二年生）

仕舞
（二年生）

三大学合同発表会（於 上田能楽堂）

全員の仕舞・素謡を発表しました。

八月 夏合宿（於 氷ノ山家）

練習曲「田村」「小袖曾我」「羽衣」等
（一年生）

「敦盛」「賀茂」「船弁慶」等
（二年生）

十一月 六十周年記念自演会（於 湊川神社神能殿）

能 「土蜘蛛」

舞囃子「清経」 新谷 宏

「班女」 飯塚 昌代

「敦盛」 瀬恒 直人

「胡蝶」 土手下和美

「松風」 前田 祥城

十二月 クリスマスコンパ（於 六甲パーラー）

恒例のプレゼント交換を行いました。

平成五年活動内容

三月 春合宿（於 小豆島 きらく荘）

歓送謡会（於 松泉館）

舞囃子「融」 上嶋 一臣

「鶴亀」 佐藤 誠

「狸々」 弘 央子

四月 古典芸能発表会（於 神戸大学学生会館和室）

向は愛ら心かな



平成五年度決算報告

収 入	支 出
今期徴収部費	先生謝礼
414,000.-	360,000.-
大学援助金	自演会
140,000.-	2,062,262.-
先輩寄付金	歓送謡会
632,000.-	312,308.-
発表会役料	旧三商大発表会
1,510,900.-	195,000.-
その他の金	学連春季舞台料
452,040.-	26,400.-
繰越金	三大学発表会
580,263.-	81,000.-
	学連費
	24,000.-
	通信・渉外費
	142,173.-
	文具費
	12,404.-
	雑費
	31,616.-
	来期繰越金
	482,040.-
合 計	合 計
<u>3,729,203.-</u>	<u>3,729,203.-</u>

役員紹介

幹事長	B 43	清水 正治
副幹事長	L 43	芝原 美樹
会計・渉外	L 43	源代 真弓
渉内	L 43	菅 美津子
文総委員	J 43	古淵 雅子
風韻	B 42	瀬恒 直人
	A 43	藤原 一司

編集後記

◎「風韻」第二十六号をお届け致します。

お忙しい中、原稿をお寄せ頂きました皆様方に深く御礼申し上げます。早くから原稿を頂きながら発行が遅くなりまして、大変申し訳ありませんでした。また印刷、出版に御協力を頂きましたK O Y O 21社長の松田先輩並びに関係者の方々、本当にありがとうございました。

◎我が神戸大学能楽部も新入生を九人程迎えました、ますます賑やかな雰囲気の中で日々練習に励んでおります。これから秋に向けてより一層の努力を惜しまず、能楽部を盛り立てていこうと、部員一同張り切っております。

編集者 編集協力

B 42 瀬恒 直人	P 42 新谷 宏
A 43 藤原 一司	